

(20/26) が 10^3ng/ml 以上を示し、残り 6 例は 20ng/ml 以下、 $25, 27, 32, 160\text{ng/ml}$ であった。AFP の経過観察がなされている 19 例の経日の変動をみると肝癌発見 1 年以前に比べ発見後により高値を示したものが 13 例(内 4 例は発見時 10^3ng/ml 以下であったが)、2 週間以後に 10^3ng/ml 以上になった)、減少したものが 1 例、あまり大きな変動を示さず終始 200ng/ml 以下にとどまったものが 5 例であった。

肝癌発見後の 22 例 CEA の最高値は 2.5ng/ml 以下から 8.2ng/ml まで分布したが、そのほとんど(17/22) が 5.0ng/ml 以下であった。CEA の経過観察がなされている 15 例の経日の変動をみると肝癌発見 1 年以前に比べ発見後により高値を示したものが 7 例、減少したものが 2 例、終始 2.5ng/ml 以下にとどまったものが 6 例であった。

HBs 抗原は 10/26 例に、HBs 抗体は 9/24 例に認められ両者共に陰性は 8 例、逆に共に陽性はわずかに 1 例にすぎなかった。HBs 抗原・抗体陽性例の内、経過観察がなされている 4 例の HBs 抗原力価と 10 例の HBs 抗体力価の経日の変動を各々同一リニアキットで求めてみると、肝癌発見 1 年以前に比べ発見後に抗原力価がより高値を示したものが 1 例、減少したものが 1 例、有意の変動を示さなかつたものが 2 例であった。また HBs 抗体力価が経過につれてより高値を示したものが 2 例、減少したものが 4 例、有意の変動を示さなかつたものが 4 例であった。

25. びまん性肝疾患の経過観察中 hepatoma の発生を認めた 26 症例の検討(その 2)一早期肝癌検出への考察一

今枝 孟義 仙田 宏平
加藤 敏光 浅田 修市
山脇 義晴 土井 健誉
(岐大・放)

この 11 年間に経験した 143 例の肝細胞癌(以下肝癌)を対象として核医学的複合検査法による切除可能という意味での“小さな肝癌”的発見の可

能性を検討したので報告した。143 例の男女比は 107:36 であった。年齢分布は 50~60 歳代が 63% を占めた。肝疾患例 1533 例の AFP の内、 400ng/ml 以上を示したものが肝癌 68% (93/137) であるのに對し慢性肝炎 1% (6/770)、肝硬変 3% (10/336)、転移性肝癌 7% (7/101) であり、 AFP による肝癌の診断的価値は非常に高いが早期発見への手段としては疑問が残った。CEA による肝癌の診断的価値は、それのみでは低いが AFP と組合せることによって意義を認めた。AFP 20ng/ml 以上で CEA 8.5ng/ml 以下の範囲に肝癌が 97% (94/97) を占め、逆に転移性肝癌は CEA 10ng/ml 以上に 92% (33/36) を占め、しかも AFP 20ng/ml 以上の 11 例すべてを占めた。HBs 抗原陽性率は肝癌 42% (58/137)、しかも肝硬変合併群では 50% (49/98) であるのに對し慢性肝炎 17% (135/794)、肝硬変 26% (99/384)、転移性肝癌 3% (3/101) であり HBs 抗原は肝癌に高率に認められた。HBs 抗体陽性率は肝癌 28% (37/134)、慢性肝炎 29% (229/786)、肝硬変 30% (115/385) と大差を認めなかつた。転移性肝癌は 42% (42/101) と高かった。コロイド肝シンチにおける肝癌 43 例の検出部位は右葉に 63%，左葉に 6%，両葉に 26% であり、残り 5% は検出しえなかつた。右葉を Cantlie 氏線によって右と中区域に分けると右は中区域の 2 倍弱を占めた。検出しえた最小肝癌は右葉で $4.5 \times 3.45 \times 3.5\text{cm}$ 、左葉で $2.0 \times 3.0 \times 2.0\text{cm}$ であった。 ^{67}Ga シンチ、RI アンギオはコロイド肝シンチに比べ肝癌検出率は非常に低く早期発見にはあまり役立たず質的診断にとどまるべきものと思われた。

26. 核医学検査法と超音波検査法の併用による肝疾患診断(第 1 報)

油野 民雄 桑島 章
多田 明 利波 紀久
久田 欣一
(金大・核)

近年、超音波診断装置の進歩に伴い超音波診断の臨床的有用性は著しく向上した。従来、著